

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
259	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
An evaluation of the impact of a large reduction in alcohol prices on alcohol-related and all-cause mortality: time series analysis of a population-based natural experiment. アルコール飲料の価格大低下が飲酒関連疾患および総死亡に与える影響の評価：一般住民対象の自然実験の時系列解析	
執筆者	
Kimmo Herttua, Pia Mäkelä, Pekka Martikainen	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Epidemiol 2011;40:441-454	
キーワード	
飲酒、商業、経済学、死亡率、飲酒関連疾患、心血管疾患	
要 旨	
目的： 2004年にフィンランドで起こったアルコール飲料の価格大低下が飲酒関連疾患死亡、総死亡および心血管死亡に与えた影響について検討した。心血管死亡のうち飲酒が関連しているものは飲酒関連疾患死亡に含まれるため除外した。	
方法： 1996年から2006年にフィンランドでの月毎の死亡データに対して時系列介入解析モデルを用いてアルコール飲料の価格低下の影響を検討した。飲酒関連疾患死亡は基礎疾患と寄与原因の情報をもとに定義した。解析は男女別に15-39, 40-49, 50-69、および70歳以上の年齢区分別に解析した。	
結果： アルコール飲料の価格低下後飲酒関連疾患死亡は全体傾向と季節別変動を調整しても40-49歳の男性、50-69歳の男女で増加した。つまり飲酒関連疾患平均死亡率はそれぞれ17% [95%信頼区間(CI) 1.5, 33.7], 14% (95% CI 1.1, 28.0) および40% (95% CI 7.1, 81.7) 上昇した。このことはアルコール飲料価格低下後100,000人当たり毎月それぞれ2.5, 2.9 および1.6人の死亡増加があったことになる。飲酒関連疾患死亡とは対照的に心血管死と総死亡は低下した。70歳以上の男女ではそれぞれ7%と10%の心血管死亡率の低下があり、これは100,000人当たり毎月19人および20人の死亡低下があったことになる。同様に総死亡率はそれぞれ7%と14%の低下があり、100,000人当たり毎月42人および69人の死亡低下があったことになる。	
結論： 時系列解析の結果、アルコール飲料価格低下後飲酒関連疾患死亡が40歳未満の年齢層以外では増加したが、心血管死が多い比較的高年齢層においては飲酒による好影響が飲酒による悪影響にある程度において勝っていた。	